フォンターネの長編小説『縒りは戻せず』について

清　水　純　夫

1

フォンターネ全集版の注によると、1887年の夏から1890年12月にかけて執筆された彼の晩年の長編小説『縒りは戻せず（Unwiederbringlich）』[(1)]は1891年度の文芸雑誌『ドイツ評論（Deutsche Rundschau）』に掲載され、1891年11月（但し日付は1892年）に第1版が刊行された（985）。この小説は実話に基づいている。全集版の注によるとフォンターネの知る実話のあらましは以下の通りである。

シュトレーリツの宮廷に侍従として仕える男爵は、妻がいるにもかかわらず別の女性に惚れ込んだため、妻を離縁してその女性と結婚しようとした。しかし彼女は離婚した彼を笑いとばし、別の金持ちと婚約するところだと彼の求婚を拒否する。2年後、かつての夫婦は縒りを戻し、盛大に再婚の式を挙げる。しかし突然、妻は姿を消す。そして池に浮かんでいる彼女の水死体が発見される。彼女の部屋に残された手紙にはただ「縒りは戻せず（unwiederbringlich）」とのみ書かれていた（997）。

これが実話のあらましである。フォンターネはこの実話の大枠は維持しながらも、大きな変更として舞台をシュトレーリツからシュレスヴィヒ・ホルシュタインとコペンハーゲンに移しかえ、さらに時代も少し溯った1859年～1861年に設定し直した。この時期はシュレスヴィヒ・ホルシュタインを巡ってデンマークとドイツの間で緊張が高まっていた時期に当たるばかりか、「内閣ばかりか君主制さえも脅かされていた」（683）と作品の中でも述べられているように、デンマークの国自体も危機的状況にあった時期でもある。このような状況下で、物語の主人公ホルクはデンマーク宮廷の侍従を勤めている。しかし、「コペンハーゲンでは全てが世俗的で、享楽と官能への奉仕と陶酔ばかりです」（590）と述べてデンマークを退嬰・退廃の国とみる彼の妻クリスティーネには夫のこの勤務が気に入らないし、シュレスヴィヒ・ホルシュタインの帰属についても彼女は「ドイツはともかくプロイセンはお断りです。私は常にシュレスヴィヒ・ホルシュタインの熱烈な支持者です。」（590）と語り、彼女がデンマークもプロイセンも嫌っていることを明確に示す。一方、ホルクが夢中になるデンマーク宮廷の女官エバは冷たくホルクに肘鉄を食わす。ホルク、クリスティーネ、エバという3人の主要な人物の行為の動機や考え方は全てこの時代と深く関わっている。そのことを理解するためには時代背景、特にシュレスヴィヒ・ホルシュタイン問題についての知識が必要不可欠である。それゆえ、まず、作品を考察するにあたっ

て必要な範囲でシュレスヴィヒ・ホルシュタインを巡る歴史を概観しておくことにする[(2)]。

2

シュレスヴィヒとホルシュタインの国境に沿ってアイダー川が流れている。「811年にはその南限を画するかたちでアイダー川がデーン人国家とフランク王国の国境とされた」(北欧史202頁)が、「1460年にホルシュタインの領主シャウエンブルク伯家に男系継承者が跡絶えたことにより、1446年以来デンマーク王となっていたオレンボー家のクリスチャン1世が、リーベでスレースヴィとホルシュタインを＜永遠に分離せず＞と約束した」(北欧史202頁)。その後、1814年、ウィーン会議によりデンマークにはラウエンブルク公爵領が与えられ、デンマーク王はシュレスヴィヒ、ホルシュタイン、ラウエンブルク公爵領の君主となった。つまりデンマーク王は「同君連合国家＜ヘールスタート＞の君主」(北欧史202頁)となったのである。ただし「ホルシタインは1814年のキール条約によって、主権はデンマークにあって、しかもドイツ連邦にも加入していた」(工藤291頁)。ところがドイツに「1830年のフランス7月革命による自由主義の波が到達し」(北欧史205頁)、そのためシュレスヴィヒとホルシュタインの2つの公爵領を1つにしようとする「シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン主義」(北欧史206頁)が強まる。これはドイツにおける統一に向けての民族主義と言えよう。それに呼応するようにこの潮流はまた「デンマーク民族意識を呼び覚まし」(北欧史206頁)た。なぜならホルシュタインの住民はほとんどがドイツ人であるのに、シュレスヴィヒでは半数近くがデンマーク人で、言語もドイツ語とデンマーク語が半々であったので、デンマークにおいては「デンマークはアイダ川まで」(北欧史208頁)とするアイダーデンマーク主義の潮流が強まり、この2つの流れは鋭く対立することとなる。特にデンマーク国内の「ナショナルリベラル」(北欧史209頁)は「政治的スカンディナヴィア主義」(北欧史209頁)を持ち出し、シュレスヴィヒとデンマークと北欧(スウェーデン、ノルウェー)の一体性を強調する。このことから「反絶対王制の自由主義運動が、政治的スカンディナヴィア主義とまったく根を同じくしていたことがわかる」(村井4頁)。このようにここにはデンマークにおける単一民族の統一国家への民族主義が認められる。

こうした中で、1845年にデンマーク王クリスチャン8世は、「王室の男系継承者の断絶の際、ラウエンブルクとスレースヴィはデンマーク王位に与えられた領土であるために(‥‥)女系継承を認めているデンマーク＜国王法＞(1665年)に基づいて、王位継承者に引き続き受け継がれるべきであるとした。一方、ホルシュタインの一部には、古来の男系継承権にこだわるザリエル法が適用されるべき領地が存在し、したがって、将来、デンマーク国家からホルシュタインの切り離しが起こりうることを肯定したのであった。こうして、王は結果的にナショナルリベラルの＜アイザー政策＞と同様の考え方を示した」(北欧史212～213頁)。つまり王はシュレスヴィヒとホルシュタインの両方の君主でもあるというそれまでのヘールスタート主義を捨て、シュレス

ヴィヒとホルシュタインを分離し、シュレスヴィヒだけをデンマークに組み入れようとするナショナルリベラルのアイダーデンマーク主義と同じ考えを示したことになる。王は絶対王政の存続のためにデンマークナショナリズムに迎合する方向に大きく舵をきったのである。

しかし1848年1月、クリスチャン8世は死去し、代わってフレデリック7世が即位する。同年、3月革命が勃発するや、「デンマークのナショナル・リベラリストらはアイダー川までの民主主義的デンマーク国家の実現を目指し、一方シュレスヴィヒ・ホルシュタイン主義者らは両公国を一体化して独立国家とした上での民主主義的ドイツ統一を目指した」(柴田190～191頁)。デンマークでは「三月内閣」(北欧史214頁)が誕生し、「ホルシュタインには自由主義憲法と、またデンマークを離れてドイツに帰属する自由とを認める一方で、スレースヴィには王国と同種の憲法を施行する意志のある旨を表明した」(北欧史214～216頁)。これはデンマークからホルシュタインを切り離し、シュレスヴィヒをデンマークに併合することを意味するもので、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン主義者には到底受け入れることはできないものである。こうしてついに1848年4月、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン主義者とデンマーク軍の間で戦闘が開始される。「第一次スレースヴィ戦争の開始である」(北欧史216頁)。プロイセンの援助により当初はシュレスヴィヒ・ホルシュタイン側が優勢であったが、まもなく、勢力地図を大きく書き換えることを望まなかったロシアとイギリスがプロイセンに圧力を加えて戦争から手を引かせた結果、1850年、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン軍は敗北する。その後も戦闘は繰り返されるが、1851年、最終的にシュレスヴィヒ・ホルシュタインの敗北が確定し、デンマークの支配下に置かれることになる。しかし「民族主義の抑圧・勢力均衡の維持といったことが、時代のヨーロッパの要請」(北欧史220頁)としてヨーロッパ列強は今度はデンマークに強い圧力を加えた結果、ついに1852年、ロンドン条約が締結され、デンマークはアイダー政策を断念し、ヘールスタート体制で行くこととなった。即ち、「デンマーク人にとっては当時かかえていた問題を何ひとつとして解決されたことにはならず、かえってデンマークは旧体制へとひき戻されてしまったことになる。それは、デンマーク自らが打破していかねばならない国外からの枷であり、その過程において再びドイツと衝突せざるをえなかったのである」(村井6頁)。

しかし、1855年10月、デンマークでは「全ヘールスタートにかかわる＜共通憲法＞が発布された」(北欧史230頁)。「翌年6月にプロイセン・オーストリアが宣言違背として抗議」(北欧史231頁)。1857年、ナショナルリベラルのハルがデンマークの宰相となる。それをうけて国王は1858年11月に、「国王宣言を発表し、共通法令案はホルシュタイン＝ラウエンブルクに関して完全に撤回され、これら公爵領にも関わる共通な問題は、国王の絶対主権のもとにおかれることを明らかにした」(村井7頁)。こうして王は再びアイダーデンマーク主義に戻った。これに対しホルシュタイン地方議会はシュレスヴィヒを共通法令の適用から除くよう強くデンマークに要請。ドイツ国内でもシュレスヴィヒ・ホルシュタイン問題で世論が沸き立つ。こうした中で1859年11月、宰相ハルは退陣する。しかし1860年2月、ハルは再び返り咲き、第2次ハル内閣が誕生。1861年3月のイタリ

ア王国の誕生も「デンマークのナショナルリベラルに熱烈な共感を呼びさまし」(北欧史235頁)た。フォンターネの『縒りは戻せず』の時代設定である1859年〜1861年にはこのハル退陣の1859年11月から再び返り咲く1860年2月の3ヶ月間がまるまる含まれ、作品の重要な背景を成している。

1863年になるとハルはスウェーデンの支持を得るべく精力的に交渉を行う。「3月までスウェーデン・デンマーク間に夢想的な北欧の連邦国家構想や同盟構想が語られたりしたが、結局、なんらの進展もなかった」(北欧史235頁)。さらに1863年3月、「デンマーク政府はいわゆる<3月特許状>を公にし、ホルシュタイン=ラウエンブルクに独立した確固たる地位を与え」(北欧史235頁)るとした。同年7月にはドイツ連邦議会がデンマーク王に「3月特許状」の撤回を迫る。デンマークとしては緊迫した情勢の下では、戦争になった場合に何としてもスウェーデンの援助がほしく、交渉を重ねるが、ついに同年9月、スウェーデンは「英・仏両列強の支持がないかぎりデンマークとの同盟に踏み込まないことを決定した」(村井9頁)。事実上、デンマークはスウェーデンに見捨てられたのである。「3月特許状」の再度の撤回要請も拒否したデンマークに対し、1864年2月、ついにドイツは戦闘を開始し、ここに第二次シュレスヴィヒ・ホルシュタイン戦争が勃発するが、結果はドイツ側の圧勝に終わる。1865年8月のガスタイン条約でシュレスヴィヒはプロイセンの、そしてホルシュタインはオーストリアの領土となる。翌1866年6月、プロイセンとオーストリアの間で普墺戦争が起き、勝利したプロイセンはプラハ平和条約によってドイツ連邦を解体し、虎視眈々と狙っていたシュレスヴィヒ・ホルシュタインを自国に併合することに成功する。このように最終的にはシュレスヴィヒ・ホルシュタイン史は、登場人物のホルクもクリスティーネも、そして作家フォンターネも望んでいなかったプロイセンによる併合という最悪の結末に終わるのである。以上が作品の舞台となっているシュレスヴィヒ・ホルシュタインとデンマークについての歴史の素描である。

重要な点を再度まとめると次のようになる。これまでデンマークにはシュレスヴィヒ・ホルシュタインが1セットで属していたが、デンマークはシュレスヴィヒからホルシュタインを切り離してシュレスヴィヒだけを自国に併合しようとする。それとは対象的にシュレスヴィヒ・ホルシュタインの側は、シュレスヴィヒ・ホルシュタインは1セットのままデンマークから完全に分離し、独立すべきだと主張する。この2つの対立する流れを利用してプロイセンはシュレスヴィヒ・ホルシュタインを自国に併合しようとする。スウェーデンはデンマークとは一線を画し、この問題に深入りすることを避ける。これらの情勢が作品の背景となっており、それが主要な登場人物たちに色濃く反映しているのである。そのことを念頭に置いた上で、以下、具体的に登場人物について考察することにする。

3

ホルクとクリスティーネが結婚して17年の歳月が過ぎ去ろうとしているが、最近の7年間の結

婚生活は決して幸せとは言えないものである。結婚した当初のホルケビー村の古い館での幸福な時期とは対照的に、新しい館のホルケネース城に移ってからは特に夫婦の亀裂は危機的なまでに拡大した。何故そうなったのか。まず、一方の当事者であるホルクからみていくことにする。

ホルクは名門の貴族の出である。だから自分の家柄を非常に誇りに思い、自分の家の系譜ばかりでなく、比較の対象として他の貴族の系譜にもこだわりをもつ。中世封建主義の衰退に伴い、貴族の果たす社会的役割と存在意義がますます薄れていく歴史的状況下においては、自分のアイデンティティを系譜という過去の歴史にしか求められない滅び行く階級としての貴族の追い詰められつつある意識がホルクの家柄重視にも反映しているのである。こうしてホルクの中では過去は美化され、肯定される。だから彼は旧体制を支持する保守的な人間となり、アナクロニズム的要素が不可避的に纏い付く。周囲の人たちはこの行過ぎたアナクロニズムに凝り固まった彼を「歴史の注釈の付いた博物館のカタログのようなもの」(667) と噂する。さらに、とりわけホルクの決定的なアナクロニズムと言うべきものは、シュレスヴィヒ・ホルシュタインをデンマークへ、という彼の政治的信条である。これは、先の歴史の素描によれば、ヒールスタート主義に近いものだが、微妙に異なる点もある。S. Blessinによると、これは18世紀の「大スカンディナヴィア主義（Gesamtstaatsidee）」[(3)]と言うべきものである。彼によるとその内容は次の通りである。「ホルク伯爵はシュレスヴィヒ貴族内部の別の党派を代表していた。これはシェール・プレセン（Scheel-Plessen）男爵の下で50年代末ごろまで非常に影響力のあったグループで、大スカンディナヴィア主義を信奉して、公爵領がデンマーク王国から分離することに反対した。しかし、同時にまたシュレスヴィヒのホルシュタインからの分離をも拒否し、この両公爵領はデンマークの州としてではなくデンマーク君主国の対等の部分であるべきだと主張した」[(4)]。Blessinはさらにホルクについて次のように述べている。「シュレスヴィヒ・ホルシュタインの他にスウェーデンとノルウェーもデンマーク君主国に属していた18世紀のこの大スカンディナヴィア主義という栄えある歴史意識を抱く人々の側にホルクも立っている」[(5)]し、ホルクは「シュレスヴィヒとホルシュタインをデンマーク王室の相対的に独立した州として維持することを主張する大スカンディナヴィア主義者たちの支持者である」[(6)]と。ホルクの政治的理想は、シュレスヴィヒ・ホルシュタインをデンマークに従属した州としてではなく、デンマークと対等の言わば独立した州と位置付けようとする点で、ヘールスタート主義とは異なるし、さらにシュレスヴィヒ・ホルシュタインだけでなくスウェーデンとノルウェーもデンマークに属する一大帝国を、即ち大スカンディナヴィアにデンマークを盟主とする他民族の大帝国を築こうとする点で大スカンディナヴィア主義なのである。そしてホルクはそこの王に仕えることを夢見る。それは現在のデンマーク宮廷の壮麗化であり、理想化された過去のデンマーク宮廷の再現である。ホルク自身、「私は新しいデンマークよりも古いデンマークの方が好きです」(672) と語っている。だからホルクは、大帝国への発展の可能性を秘めたデンマーク宮廷の、侍従という現在の職に極めて満足している。しかし、この彼の姿勢は、シュレスヴィヒ・ホルシュタインをデンマークから独立させて単一民族の統一

国家を目指す民族主義の流れに逆行するアナクロニズムであり、言わばドイツ民族に対する裏切りとも言えるものである。少なくともホルクにはドイツに対する愛国心というものは認められない。侍従職が気に入っているホルクが嬉々として王女の宮殿を歩き回ることに対する、「ホルクのシュレスヴィヒ・ホルシュタイン魂がそれを禁じなくても大目にみるつもりだ」(595) というクリスティーネの兄アルネの発言も、彼がホルクの裏切り行為を今は黙認する、という意味に解釈できる。またデンマークの老王女の「異端のシュレスヴィヒ・ホルシュタインの人」(648) という発言も、ホルクがドイツ人の中では異端児ということを突いた発言で、いずれもホルクの愛国心の欠如を裏付けるものであろう。

またホルクの倫理観は決して厳格なものではなく、そこには真面目さと不真面目さが同居している。その点で彼はエバが言うように「中途半端」(693) な性格なのである。たとえば彼の趣味は動物の飼育であり、子供たちの教育にはほとんど関心が無い。彼は次のように言う。「教育においても最善のものはあらかじめ神によって定められている予定説であり、恩寵だ。この点ではいつもはルター主義の私もカルヴィンの味方だ」(601)。ホルクはカルヴィン主義・予定説に近い楽天的な考え方をしており、この点では妻とは対照的である。さらに、ホルクは名門の貴族の例に漏れず家父長制的であるが、「ホルクより優れた特性に恵まれた妻に比べると彼はかなり劣っていた」(572) とあるように、知性・知識の点で明らかに妻に劣る。ホルクにとってクリスティーネは立派すぎる妻なのである。このことで家父長としてのホルクのプライドは傷つけられ、「クリスティーネの美徳に悩まされて、優秀さの点でもう少し劣る妻を望む瞬間もあった」(572) のである。妻との仲がギクシャクしているから気晴らしとしてホルクは享楽・刹那的快楽を求めるようになる。もともと倫理観が希薄だから、一旦この情動が動き出すと歯止めが利かなくなる。彼はデンマーク宮廷の侍従であることを盾に、デンマークに逃亡する。

ところで、デンマークがホルクを魅了するのは、そこが彼の政治的理想実現の地であるだけでなく、他にも理由がある。靴屋の売子だった娘が王に見初められて今や愛人ダナー夫人として王の寵愛を一身に受けているという事実が示しているように、玉の輿に乗ろうという風潮がコペンハーゲンの町を支配し、官能的・退廃的な雰囲気を生み出し、それがホルクを魅了する。この雰囲気はホルクが滞在する宿の母娘の官能的魅力や誘惑的言動などにも認められる。さらにはホルクが仕える老王女のゴシップ好みなどもこうした雰囲気と無縁ではない。このようにホルクを取り巻くデンマークはまさに退嬰・退廃のデンマークなのである。しかしこのデンマークがホルクの荒んだ内面には心地よく感じられる。だからちょっとした契機がありさえすれば、中途半端な性格のホルクは容易に不真面目さに支配され、官能の誘惑の虜になりかねない。その契機をスウェーデンから来た女官エバが与え、ホルクは否応無く彼女に惹かれていく。スケートでの危険な遠出と、火事で燃えさかる城からの奇跡的な脱出劇を経て、エバを求める彼の気持ちは頂点に達し、ついに彼は妻と離婚して彼女と結婚する決心を固める。しかし妻と離婚したにもかかわらず、思いがけずも求婚をエバに手厳しく拒絶され、失恋したホルクは、しばらく外国に滞在し、心の傷を癒した後で、周囲の

勧めを受け入れてクリスティーネと再婚する。しかし、ホルクとクリスティーネの間の不和の原因が取り除かれたわけでもないし、再婚するメリットも必然性も無い以上、この再婚は無謀なものと言わざるをえない。結局、この再婚がクリスティーネの自殺を引き起こすことになる。

4

一方、クリスティーネはあらゆる点でホルクとは対照的である。クリスティーネにとって「古ルター派、敬虔主義、ヘルンフート派でないものはほとんど全て邪教なのだ」(593) と彼女の兄が述べているように、彼女は大変敬虔で、自分が信奉する宗派の教義に従順な女性である。だから彼女にとっては信仰と、その教義が要請する義務と禁欲が何より重要なものとなる。しかしこれらは同時にプロイセン精神に代表されるものでもある。クリスティーネ自身、「プロイセンでは全てのものが義務と信仰に根ざしている」(589) と言っている。つまりクリスティーネは精神的には親プロイセンなのである。しかし彼女の政治的立場は、シュレスヴィヒ・ホルシュタインはデンマークから独立すべきだが、独立後は、先に引用した「ドイツはともかくプロイセンはお断りです。私は常にシュレスヴィヒ・ホルシュタインの熱烈な支持者です」という彼女の発言からも明らかなように、シュレスヴィヒ・ホルシュタインは決してプロイセンに組み込まれてはならないというものである。この点で彼女は明確に反プロイセンなのである。このように彼女の中には親プロイセン精神と反プロイセン精神が同居しており、そのためクリスティーネは当初から矛盾を抱えているのである。

このようなクリスティーネの立場は親デンマークのホルクとは全く異なったものである。このことはホルクへの愛情にとっても決して好ましいものではない。とくに、彼女が信奉するヘルンフート派の教義では、「＜戦友結婚＞の締結で重要なのはイエス・キリストへの愛であって、男女間の親密な愛情は特に問題とされない」[(7)]からなおさらである。つまりクリスティーネにとっては神への愛が一番大切なものであり、ホルクへの愛はその下位に位置する二義的なものとなる。彼女にとってホルクへの愛は、神への絶対的な愛の1つの具体化にすぎず、相対的な愛、即ち代替可能な愛、にすぎない。それは言わば見せ掛けの愛であって、このような愛に彼女が満足し、幸せを感じるのは彼女の錯覚であり、幻想にすぎない。はっきり自覚していなくても、彼女の関心はもっぱら神・永遠・死という、言わばロマン主義的要素と深く関わる納骨堂の修理に向けられ、そのためホルクの現世的・世俗的・俗物的な動物飼育に対しては彼女は全く関心を示さないばかりか、嫌悪感さえ抱いている。このことからもクリスティーネがホルクを高く位置付けていないことは明らかである。このように、ロマン主義的傾向を示すクリスティーネは世俗的・俗物的なホルクに対して反発を感じるのである。

しかも義務と禁欲を重んじるクリスティーネには官能的要素を許容するホルクや退廃的なデンマークに対する寛容さが欠如している。その点でクリスティーネは、彼女の兄が彼女を「美しき

魂」(593)に譬えているように、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の『美しき魂の告白』の女性に似ている。「美しき魂」の女性の叔父は次のように言う。「自分の殻に閉じこもって孤独に道徳の修業にふけるのはどうもよくない。むしろ、精神的に道徳の修業を目指そうとする者はどうしても自分の繊細な官能性をも同時に磨き上げなければならないのだ」[(8)]。ここで叔父は「美しき魂」の女性を批判しているが、この批判はそのままクリスティーネにも当て嵌まる。活動により官能を磨くことが叔父により、また『修業時代』の理念として、重視されているが、彼女にはこの観点が全く欠落している。『修業時代』では、禁欲のみに耽ることが結局「美しき魂」の女性と婚約者との愛の破局を招いたが、これと同じくクリスティーネもホルクに対して疎遠になる。ホルクとの結婚生活の破綻がすでに暗示されていると言えよう。

そしてクリスティーネとホルクの破局の第一歩は彼の家父長制と彼女との衝突として顕在化する。ところでヘルンフート派の教義に関して長谷川氏は、「妻は神のために闘う戦友であり、かつ夫の良き協力者となる。婚姻関係にある男女は、神への愛の奉仕という共通目的を遂行するがゆえに、神の前で等しく協力者として立つことになり、ここには男性の所有物としての女性の姿はない」[(9)]と述べている。これをクリスティーネに当て嵌めれば、彼女の場合には夫に依存したり服従するのではなく、ヘルンフート派の信仰を武器に夫と対等の立場に立とうとする、ということになろう。それは家父長制に逆らうことでもある。このような彼女の立場はフェミニズム的立場に他ならないであろう。つまりクリスティーネの姿勢にはフェミニズム的要素が認められるのである。

しかもクリスティーネはホルクよりも知性や能力の点で勝っている。そのため彼女はプロイセン的義務や禁欲をも動員して、ホルクの家父長制ばかりか快楽主義に対しても攻撃を強める。「人は楽しみや喜びのために生きるのではなく、自分の義務を果たすために生きる」(615)ことを振りかざす妻に対して、ホルクはまともには反論することができず、妻への彼の気持ちは冷えていくばかりである。ホルクにとってクリスティーネは「温かみのある女性」(772)ではなく、「世にも冷たい氷山」(772)、「多くの美徳を誇ることはできても謙虚という美徳だけは持ち合わせていない」(744)女性となる。

しかもクリスティーネの宗教的立場は教義に完全に忠実なものではなく、ある程度我流の要素が混入したもの、その意味ではいい加減なものである。たとえば、クリスティーネは、「カルヴィンの予定説は間違っており、拒絶されるべき」(699)と言っている。これがクリスティーネがカルヴィン派支持のプロイセンを拒否する一因と言える。しかし現実にはプロイセンはルター派も認める宗教的寛容政策をとってきた。それは以下のような理由による。「ストラスブール大学に学びカルヴァン主義に触れたかれ(=ブランデンブルク=プロイセンのヨーハン・ジギスムント<在位1608-1619年>――引用者注)は、即位後ただちに、<化石化>現象を呈していたルター主義に代えて、新たにカルヴァン主義を採用することによって自国を改革せんとし、またみずからも1613年、<福音=改革派>(die Evangelisch=Reformierte)に改宗した。(‥‥)。ブラン

デンブルク＝プロイセンにおいては、信仰はルター派と改革派とに分裂し、(‥‥)。ブランデンブルク＝プロイセンは、ヴェストファーレン条約で定められた«Cujus regio, ejus religio»（かれの領土にはかれの宗教を―君主の信仰的一致）の原則を放棄して、＜宗教的寛容＞（Toleranz）を国策としなければならなくなった」[10]。だからクリスティーネの方がプロイセンよりも宗教では頑なで教条的と言うことができる。しかし、同時にクリスティーネは、「営業とカルヴィン主義がうまく調和しているスイスの寄宿学校は独特のものです。とても世故に長けていることがいつもカルヴィン主義の耐え難い面でしたが。」(586) とも述べている。裏を返せば、クリスティーネは世故に長けた耐え難い面さえ無ければカルヴィン主義も可として、子供の教育の寄宿学校についてはカルヴィン主義の学校に決めるという柔軟さも見せる。ここには明らかに矛盾が認められるし、そのことはクリスティーネがプロイセンの宗教政策に同調しえることを示している。またヘルンフート派は予感を否定するにもかかわらず、クリスティーネは「予感を信じる」(569)。これも彼女の宗教的矛盾を示している。彼女はヘルンフート派と完全には一体ではないのである。しかもプロイセンはザクセンに出現したヘルンフート派を認めなかった。「シュペーナー、フランケの場合と違ってプロシア（＝プロイセン ――引用者注）はヘルンフート兄弟団の入国を認めなかった」[11]。ヘルンフート派に対するプロイセンのこの厳しい対応は明らかに「宗教的寛容」の国策に矛盾している。こうしたことから、宗教的態度においてもクリスティーネとプロイセンには一貫性を欠いている点で共通性が認められるのである。

このようにクリスティーネには我流・身勝手に宗教を利用している独善的な面があるし、プロイセン主義よりさらに頑ななところがある。しかしそれがクリスティーネによって自覚されることはない。だから彼女は『美しき魂の告白』の女性同様、自分に都合の良いように、攻撃の武器として神を引き合いに出し、権威主義・排他主義を振りかざす。まさにクリスティーネは自ら嫌うプロイセン的要素を用いてそうするのである。このようにホルクの家父長制的権威主義をプロイセン的宗教的権威主義をもって制する彼女の態度は、毒を以って毒を制する類のものと言えよう。

こうみてくるとクリスティーネとホルクの夫婦の対立は言わばプロイセンとデンマークの代理戦争の観を呈していることがわかる。それは主観的には愛国的な、反プロイセンでありながら実は親プロイセン的なドイツ人と、デンマークに魂を売ったドイツ民族の裏切り者との戦いなのである。もしクリスティーネがプロイセン主義をあくまで貫き通せば、優位な立場にある彼女がホルクに勝ったことは確かであろう。しかもそれは歴史的にはプロイセンがデンマークに勝利したことに符合する。その場合にはクリスティーネとホルクの愛は崩壊し、2人の対立は解消されず、従って再婚もありえない。再婚しなければ彼女は、たとえいかに不幸のままであっても、少なくとも自殺することはなかったはずである。しかし実際にはクリスティーネ自身、政治的には、シュレスヴィヒ・ホルシュタインの独立支持ゆえに明確に反プロイセンであった。だから、精神的な分野においてクリスティーネがプロイセン主義をあくまで貫き通すことは事実上不可能であ

り、早晩、プロイセン主義の放棄は避けられない。さらに、すでにみてきたように、クリスティーネの我流の要素が混在している以上、彼女が信奉する宗教も本物とは言えない。彼女がその宗教に完全に帰依して救いを求めることは無理であろう。それゆえヘルンフート派とプロイセン主義の支えを失った彼女は脱殻のような弱い存在となる。しかも両者を欠いても微動だにしない強さが彼女には欠けている。つまりクリスティーネには真の主体性というものは終始無かったのである。だから彼女がホルクに勝利することは不可能であるし、敗れれば彼に服従するしかない。そのため、離婚後、クリスティーネは急速に弱気になる。このようにクリスティーネが一見無謀とも思われる再婚を受け入れる土壌は初めから存在していたのである。

5

次にエバについて考察を試みる。スウェーデンからデンマークの宮廷に移ってきた女官エバは、名門マイアー・ローゼンベルク男爵家の出身で、グスタフ3世の寵愛を受けたユダヤ人の孫である。エバがスウェーデン王妃の女官をしていた時、末の王子が彼女に夢中になったため一騒動持ち上がり、そのため王によって彼女は事実上追放されたのであった。このようなスキャンダルを起こすだけあってエバは、実際、クリスティーネとはあらゆる点で対照的である。たとえばエバはクリスティーネと違って敬虔な宗教心を持ち合わせていない。また束縛を嫌い、自由を求め、そのため結婚もしない。その点で彼女はクリスティーネよりもはるかに自立した女性であり、家父長制をきっぱりと拒否する強靭な意志を持った女性と言えよう。そのため愛も彼女にとっては遊びの域を出るものではない。彼女は言わば享楽的で、翔んでいる女性なのである。また、彼女は、一見、民族主義とも無縁にみえる。スウェーデン出身のエバはデンマークやホルクに期待を抱かせながら、結局デンマークもホルクも、さらには自分が仕えるデンマークの老王女をもあっさりと見捨てて、イギリス人と結婚する。その意味では無意識に彼女はスウェーデンのエゴイズムを象徴していると言えよう。つまりエバの自己中心的な行為はデンマークとの同盟及びそれに基づく援助を拒否するスウェーデンの同じく自己中心的な歴史的行為に符号しているのである[(12)]。

このようなエバにとってホルクの存在はどのような意味をもつのであろうか。ホルクを袖にするエバの目に映ったホルク像は「中途半端」(693)で、「ドン・キホーテ」(788)である。また、凍結した海上でのスケートの冒険の時でも、岸から遠く離れることに不安を抱いたホルクが、「ここが限界だ」(749)と言うのに対して、エバは、「戻ることを考える人は戻りたがっているのよ」(749)と反論する。このエバの発言が示しているように、もし彼が冒険に命を賭ける男なら、彼女も彼が自分と結婚するに値する男と思ったかもしれない。しかし土壇場でホルクはそれを実行する勇気の欠如を示したため、結局、彼女に軽蔑され、愛想を尽かされてしまう。ホルクはエバにとってそうされて当然の男なのである。結局クリスティーネ同様、エバもホルクを見下すの

である。

一方、ホルクの目にはエバは、彼の家父長制に服従する従順な女性、しかし禁欲的ではなく享楽的で垢抜けした女性、彼のロマンである大スカンディナヴィア主義に理解を示してくれる女性、と映る。だから2人の結婚はホルクのこの民族主義的理想実現のための第一歩であり、それゆえエバが彼のプロポーズを断るはずがないと彼は判断する。「ホルクの前には北欧の英雄物語の壮大なパノラマが広がり」[13]、エバは「一族や自分自身がスウェーデンの歴史に巻き込まれていることによってホルクを魅了することが容易にできる」[14] のである。しかし彼女は、「私は歴史上の人物を演じ尽くすなどという僭越な要望などは持ちあわせていません。誰か他の人に任せます。ましてや古代史の人物などはね。」(756) と言って、ホルクのプロポーズをきっぱりと拒否する。

結局、エバはイギリスの大地主で大富豪の男と結婚する。だが彼は性的不能者であるため、男としての権威を欠き、エバに頭があがらない。即ち、家父長制は彼の場合には全く無意味で無力なのである。しかも彼は、ホルクのようなかつては名門の家柄であったとはいえ今では衰退が著しい滅び行く辺境の田舎貴族と違って、イギリスでは絶大な力を持つ大土地所有者で大金持ちである。反家父長制で大金持ちというエバの結婚条件を彼が満たしていることが、エバがホルクではなく彼を結婚相手に選んだ理由と考えられる。

こうしてエバの人間性を見抜けなかったがゆえに肘鉄を食わされてひどいめにあったホルクは、心の傷を癒すかのようにしばらく外国に滞在する。しかし、その後、彼はクリスティーネの許に戻り、約1年半後に彼女と再婚する。

6

クリスティーネにとってホルクとの再婚は彼女の武器であった反家父長制とフェミニズムの放棄を意味する。それは彼に対する敗北であり、彼女にとっては不幸なことである。この再婚は「平和ではあったが幸せではなかった」(802) というものである。しかも彼女にとって再婚が意味するところは、牧師のペーターゼンによれば、「罪びとを許すことを教えるキリスト教的な愛を抱くだけでなく、本物の女の愛をも抱くこと」(793) の実践である。またクリスティーネは、「はっきり申し上げますとホルクは完全には回復していません。もし彼があちらの令嬢（＝エバ――引用者注）と結婚して、早晩、自分の非を悟れば私も行くべき道がわかったかも知れません。しかし事はそのようには運びませんでした。彼女の方で彼を望まなかっただけのことです。だからごく控えめに言っても、もし彼女が彼を望んでいたら、この芝居のような一件は全く別の経緯を辿っていたと思われる辛い可能性がいつまでも私の心の中に残るのです。その時には私に番が回ってくることは多分無かったでしょう。私はこの悲喜劇において少しばかり代役を務めていますが、それは愉快なことではありません。」(793) と言っている。クリスティーネはこの段階でも全てホルクの方に問題があると思っているのである。このように、ホルクへの愛も無いのに、

宗教的・犠牲的な愛の実践ゆえに彼と再婚する彼女には偽善性や思い上がりが認められる。彼女はこの時点でも依然として高みからホルクを見下しているのである。しかしこれら全てをクリスティーネは自分の中に封印する。だから再婚後の彼女の生活は当然、満たされない、ほとんど意味の無い生活となる。もともとホルクとの仲がギクシャクしだしてからはクリスティーネは、安らぎと幸せがあったと過去を美化し、美化された過去の追憶に生きてきたが、再婚後はその傾向がさらに強まる。クリスティーネが好んだ次の詩が彼女の気持ちを代弁している。

夜、暖炉の火を覗き込むたびに、
マリーよ、過ぎ去った日々を思い出さないかい？
楽しく嬉しそうに笑った
あの日々と時が戻って来ることを願わないかい？

ジョンよ、私は過ぎ去った日々を思い出します。
そのころはいつも私は幸せでした。
けれどもそれはあまりにも素晴しい日々だったので、
その日々が戻って来ることを願わないのです（807)。

クリスティーネの中では過去はますます美化され、絶対・永遠なものにまで高められる。これはまさにロマン主義的衝動と言えよう。この過去が現実によって汚され、貶められることは彼女には許しがたいことに思われる。「その日々が戻って来ることを願わないのです」とは、もしそれが戻れば幻滅することが不可避だからである。再婚は明らかにこのロマン主義的衝動に矛盾する行為である。再婚が幻滅をもたらしただけであったのは当然である。このように、クリスティーネには再婚という選択肢はありえないはずだった。それなのに再婚し、出口無しの完全な袋小路に迷い込んだ彼女にはもはや死しか道は残されていない。自殺は不可避となる。結局、クリスティーネは再婚によって自滅したのである。

7

以上のことから、クリスティーネが精神的には親プロイセン主義であったことは彼女自身にとって決定的な誤りだった、と断定できよう。プロイセン主義と、シュレスヴィヒ・ホルシュタインの独立という真の民族主義は相容れないからである。またクリスティーネの一見フェミニズムにみえたものも真のあるべきフェミニズムではなかった。彼女は何よりも愛を基本に据えるべきだった。神よりも夫を優先すべきだった。もし夫への愛があれば、再婚後、宗教の桎梏の無くなったクリスティーネは、夫を愛し、幸せになれたはずである。それができなかった以上、彼女

にはやはり夫への愛は初めから無かったと結論せざるをえない[15]。

ではクリスティーネはどうすればよかったのか。彼女はプロイセンを嫌いながらも義務と信仰においてはプロイセンのように厳格だった。しかしこれは矛盾であった。この矛盾の解決のためには彼女がプロイセン嫌いを貫徹することが必要であろう。即ち、彼女には義務と信仰における寛容さが求められるのである。彼女は徒に夫を断罪するのではなく、或いは自分に従わせようとするのではなく、両者の見解の相違の共存を目指すべきなのである。ゲーテの『修業時代』の登場人物を引き合いに出せば、クリスティーネは『美しき魂の告白』の女性ではなく、言わば、欲するところに従って法を越えず、という理性と欲望が完全に調和した理想的な女性ナターリエとなるべきである[16]。『美しき魂の告白』の女性に批判的で、ナターリエを高く評価する叔父は、ナターリエでない人間が彼女のレベルに達するには、「感性的人間を包括的に知り、活動で調和させようと努める」[17] ことが必要であると主張している。クリスティーネにもこのことは当て嵌まる。彼女は禁欲ではなく、官能・感性的要素を肯定し、それを磨き上げて理性化する努力をすべきである。そうしてこそホルクとの共存の可能性が開かれる。そのためには、具体的に彼女にはシュレスヴィヒ・ホルシュタインの独立という理想実現のための有意義な活動に打ち込むことが求められよう。この活動こそがホルクの政治的姿勢の変革の可能性をももたらしうるし、神よりも夫への愛を大切にすることにより、過去を絶対的に美化する彼女のロマン主義的衝動の克服と、過去の幸福の拡大再生産を可能とするからである。

それはまた納骨堂へのこだわりにみられたように、クリスティーネが、永遠と有限を対立させて永遠に身を委ねるというロマン主義と訣別して、民族の独立という歴史の発展法則に叶った行動をすることにより、有限な日常生活に未来に向けて開かれた永遠性を付与することができるようになることでもある。それが真にクリスティーネをプロイセン的精神と宗教依存から解放し、主体性の確立と精神的自立を彼女に可能とするのである。

しかしクリスティーネにはそれは不可能だった。彼女の自殺はそれゆえ彼女の矛盾の必然的な帰結なのである。彼女のプロイセン的態度は結局プロイセンに組み込まれ、プロイセンによるシュレスヴィヒ・ホルシュタイン併合の受け皿となる。これはシュレスヴィヒ・ホルシュタインが1864年以降、プロイセンに併合される歴史的事実に完全に符合する。即ち、クリスティーネの態度に歴史の必然性が読み取れるのである。その意味でクリスティーネは時代の典型的人物と言うことができる。

＊　　＊　　＊

このようにフォンターネは実話を題材にこの作品を創作した。作品では舞台がシュレスヴィヒ・ホルシュタインに変えられたがゆえに、かえって実話よりもホルクとクリスティーネの結婚生活の破綻が彼女の宗教的な厳格さ、シュレスヴィヒ・ホルシュタインを巡る民族主義的な対立、及びプロイセンに対するフォンターネの批判的な評価などと有機的に結合され、言わば一大時代

絵巻となって描かれている。しかもそれは、人物が時代の典型として描かれている点で、フォンターネのリアリズムに貫かれている。それゆえ類稀な説得力を持った本作品はフォンターネの晩年の傑作と呼ぶに相応しい作品と言えよう。

注

テキストはTheodor Fontane: Sämtliche Romane, Erzählungen, Gedichte, Nachgelassenes. Bd.2, hrsg. von Helmut Nürnberger. 3. Aufl. München (Hanser) 1990.を使用。以下、同書からの引用は（　）内に頁数のみを示す。

(1) 原文のタイトル„Unwiederbringlich“の邦訳としては、『返すよしなく』（佐藤晃一、赤木登代）、『返すよしなし』（長谷川健一、北村清吉）、『とりかえしのつかぬこと』（岡田朝雄・リンケ珠子）、『北の海辺』（立川洋三）などがあり、まだ統一されてはいない。それゆえ本論文では敢えて、直訳に近い上に、作品内容にも最も適っていると筆者には思われる『縒りは戻せず』という訳を充てることにした。

(2) 参考にしたのは以下の4つの文献である。

1. 百瀬宏・熊野聰・村井誠人編『世界各国史21　北欧史（新版）』（山川出版社）2002年、第1版第2刷。尚、ここからの引用箇所の執筆者は村井誠人氏である。以下、（北欧史）と略す。
2. 村井誠人著『デンマークにおける政治的スカンディナヴィア主義 ―アイダー政策と政治的スカンディナヴィア主義の相関関係―』バルト・スカンディナヴィア研究会『北欧史研究』1、1982年。以下、（村井）と略す。
3. 工藤保著『フランクフルト国民議会とシレスヴイヒ・ホルシタイン問題』実践女子大学文学部紀要12、1969年。以下、（工藤）と略す。
4. 柴田隆行著『「シュレスヴィヒ・ホルシュタイン問題」と三月革命』（的場昭弘・高草木光一編『一八四八年革命の射程』所収）（御茶の水書房）2002年、第1版第3刷。以下、（柴田）と略す。

尚、本論文は横書きのため、漢数字は基本的に算用数字に改めた。

(3) Blesssin, Stefan: *Unwiederbringlich* — ein historisch-politischer Roman? Bemerkungen zu Fontanes Symbolkunst. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 48 (1974) Heft 4, S.679.

(4) ibid., S.679.

(5) ibid., S.680.

(6) ibid., S.681.

(7) 長谷川健一著『N.L.ツィンツェンドルフの「宗教的婚姻」における信仰・女性・性』大阪市立大学ドイツ文学会『セミナリウム』第24号、2002年、7頁。

(8) Goethes Sämtliche Werke, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Bd.7, 7. Aufl. 1968, S.408.　以下、H.A.と略す。

(9) 長谷川健一著、前掲書、7頁。

(10) 田中昭徳著『プロイセン民衆教育政策史序説』（風間書房）昭和44年、37～38頁。

(11) 半田元夫・今野國雄著『世界宗教史叢書２　キリスト教史Ⅱ』（山川出版社）1977年、310頁。

(12) Blessinも、「デンマーク側は過大な期待に浸っていたが、ついに長いためらいの後、スウェーデンは（‥‥）同盟はありえないとデンマークに通告した」と述べている。
Blessin, Stefan: a.a.O., S.683.

(13) ibid., S.683.

(14) ibid., S.683f.

(15) 一方、P.-I. Andersonは、「クリスティーネはシュヴァルツコッペンからプロポーズされることを期待していた。（‥‥）。彼女が自殺するのは愛してもいない男を取り戻し、愛する人を手放し、そしてそれを好ましいことだと思わねばならないからである。」と述べて、クリスティーネが本当に愛していたのは夫のホルクではなく、神学院長のシュヴァルツコッペンだったので、彼を完全に失うことになった今、彼女は自殺するのだ、と主張

する。しかし、もしクリスティーネが命を懸けるほど熱烈にシュヴァルツコッペンを愛していたのなら、彼女の進むべき道は、積極的にシュヴァルツコッペンに働きかけるか、それともシュヴァルツコッペンが彼女の愛に気づき、彼女の愛に応えてくれるまで待つか、のどちらかしか無いであろう。いずれにしても彼女が、シュヴァルツコッペンとの愛の可能性を完全に閉ざすことになるホルクとの再婚に同意するとは考えにくい。ましてや、最初から自殺するつもりでホルクと再婚することなどは敬虔なクリスティーネにはもっと考えにくい。だからクリスティーネが再婚に同意する以上は、彼女がシュヴァルツコッペンを愛していたとは言えないのではないか。このようにAndersonの説にはかなり無理があり、それゆえ同意することはできない。

Anderson, Paul Irving: Ehrgeiz und Trauer. Fontanes offiziöse Agitation 1859 und ihre Wiederkehr in *Unwiederbringlich*. Stuttgart (F. Steiner) 2002, S.218. (Beiträge zur Kommunikationsgeschichte; Band 11).

(16) 拙著『ヴィルヘルム・マイスター研究』（三修社）1996年、121頁参照。

(17) H.A. Bd.7, S.405.

Resümee

Der Roman „Unwiederbringlich“ von Fontane

Sumio SHIMIZU

Holk ist ein patriarchalischer, adelstolzer und nicht sittenstrenger Mensch. Er steht politisch auf dem Standpunkt, dass Schleswig-Holstein zu Dänemark gehören soll. Dieser Standpunkt ist anachronistisch, weil der dänische Nationalismus zu dieser Zeit heftig darauf drängt, Dänemark nicht Schleswig-Holstein, sondern nur Schleswig einzuverleiben, und weil andererseits der Schleswig-Holsteinische Nationalismus die Unabhängigkeit von Dänemark verlangt. Aber Holk hat zu dem deutschen Nationalismus keinen Bezug. Er ist deshalb mit seinem Beruf als Kammerherr des sittenlosen dänischen Hofs zufrieden. Auch die Tatsache, dass seine Frau Christine ihm in jeder Beziehung überlegen ist und er daher einen Minderwertigkeitskomplex hat, führt dazu, dass er immer wieder nach Kopenhagen flüchtet. Dabei kommt es bald zu seinem Liebesabenteuer mit Ebba.

Der Dienst Holks in Kopenhagen gefällt Christine eigentlich nicht. Sie ist eine altlutherische, pietistische, herrnhutische und patriotisch gesinnte Dame. Ihre Liebe zu Gott nimmt den ersten Rang ein, also muss ihre Liebe zu Holk an zweiter Stelle stehen. Sie legt auch großen Wert auf Pflicht und Askese. Das hat sie mit dem Preußentum gemeinsam, gegen das sie aber eine Abneigung gefasst hat. Gestützt auf die religiöse und preußische Autorität widersteht sie der patriarchalischen Autorität Holks. Hierbei ist auch ein feministischer Faktor im Spiel. Sie unterstützt die Unabhängigkeit Schleswig-Holsteins von Dänemark, stimmt aber der Einverleibung durch Preußen nicht zu. Sie ist in diesem Punkt eine Gegnerin Preußens. Sie kann deshalb ihr Preußentum nicht durchhalten. Sie befolgt auch die christliche Lehre nicht in allen Punkten. Ihr Glaube ist ohne das Preußentum zu schwach, um ihre Seele zu retten. Schließlich kann sie nicht anders, als Holk nachzugeben und seiner Forderung nach Ehescheidung zuzustimmen. Sie gibt ihre Ablehnung des Patriarchats und ihren feministischen Widerstand auf. Dadurch wird die Wiederverheiratung mit Holk für sie möglich. Da sie nunmehr frei ist von den Fesseln der Religion, könnte sie glücklich werden, wenn sie ihn liebte. Aber sie begeht Selbstmord. Das zeigt, dass auch ihr früheres Glück im alten Schloss nichts anderes als eine Illusion war und sie ihn keinesfalls liebte. Man muss also zu dem Schluss kommen: Ihr Selbstmord ist eine natürliche Folge ihrer Widersprüche. Ihr Preußentum wird von Preußen am Ende als Unterlage seiner Einverleibungsabsichten missbraucht. Das entspricht auch der geschichtlichen Entwicklung, insofern Schleswig-Holstein im Jahre 1864 Preußen einverleibt wurde.